

須坂のまちづくり「蔵の町並み保存・活用について」

1 歴史的町並みの発掘経過

須坂は明治から昭和初期にかけて製糸業により栄えた町であり、明治政府により明治5年に富岡製糸場が設立され、洋式の器械製糸技術が導入されると、北信地域でも器械製糸が始められ、須坂では明治7年に最初の製糸工場が設立された。次第に工場・工女の数も増加し、大正の初期には工女数が6,500人にも達した。彼女達が歌った、野口雨情作詞、中山晋平作曲の「須坂小唄」は当時全国に流行し新民謡の先駆けとなった。

この時代に建てられた豪壮な土蔵造りの町家が多く残っていることは、地元の方には周知のことであったが、特に評価について論じられることはなかった。

昭和60年から地元新聞に「須高地方の民家と町並み」(絵と文書)として100回にわたり掲載され、須坂の町並みと民家の美しさやその背景にある歴史と生活が市民に広く認識されるきっかけとなり、昭和61年には須坂の歴史的町並みの保存を目的とする「信州須坂町並みの会」が有志により結成され、町並みの価値を広く知ってもらう活動が展開されることとなった。

このような中で、昭和63年に日本ナショナルトラストに依頼し「信州須坂町並み調査」を行い、また、平成元年には文化庁の支援で「伝統的建造物群保存対策調査」を実施した。

歴史的建造物は347軒、その内、土蔵造りの建築物は200軒以上と言われている。

また、調査結果として、

- (1) 江戸時代から市街地形成されていた北国街道の裏街道である大笹街道と谷街道が交差する十字型町通りに土蔵造りの建物が集中しており、すでに土蔵造りの町として全国的に有名な、倉敷(岡山県)、川越(埼玉県)、栃木、喜多方(福島県)に劣らない。
- (2) 土蔵造りの建物の色彩、意匠、屋根の形などが変化に富み、非常に魅力的である。
- (3) 土蔵造りの町家以外にも、明治・大正時代の洋風建築や江戸時代の寺社建築の優れた建物が町家の町並みに接した場所に残り、また、須坂藩の武士の住まいも残っている。
- (4) 水と緑に囲まれた景観である。

ことなど高い評価を得ている。

2 蔵造りの建物の特徴及び町並みを生み出した生活の知恵と技術

土蔵造りの町家は、製糸業の隆盛とともに明治中期から大正前期にかけ建築されたものが多い。これは、製糸業の繁栄により多数の工女や職工が各地から集まり、日用必需品を供給する商家が栄え、成長した商家や製糸家はこの機に工場や店舗の増改築を盛んに行った結果

である。

なお、建築に際しては未だに記憶に新しい、明治3年の須坂騒動の焼き討ちや、明治21年の大火の経験などから、競って土蔵造り、大壁造りの家屋としている。

以後、それまでの茅葺の家は瓦屋根になり、土蔵・大壁造りの家並みは須坂の町を特徴づける景観を生み出すこととなった。

これら町並みの土蔵造り・大壁造りは、工法・技術・デザイン上で幾つの特徴を挙げることができる。

- (1) 三階建ての繭（まゆ）蔵に代表される土蔵造りの壮観さ
- (2) 「ぼたもち石」といわれる大玉の野面積みの基礎（石垣）の堅固さ
- (3) 地域の気候を踏まえた屋根瓦とその葺き方
- (4) 蔵造り・大壁造りの仕上げの手法の堅固さ・美しさ
- (5) 大工棟梁の伝統的技法にみる確かな技と粋を尽くす職人魂

3 蔵造りの建物の保存

蔵造りをはじめとする歴史的建造物による町並みは、須坂の歴史と文化の集積であるとともに、文化財や観光資源としてのみでなく商業、居住の場として活用が図られている反面、老朽化に伴い解体や建替を希望される方の相談も多くなり、町並みの保存が急務となった。

そのような中で、平成5年度に市独自で「須坂地区歴史的景観保存対策事業補助金」を創設し、土蔵造りの建物が連たん、集中する旧街道筋を中心に、「須坂地区歴史的景観保存対策事業・保存区域」に定め、区域内で行われる住宅や店舗、門、塀、広告物に対する修理・修景に要する経費を対象に補助制度を設けた。

また、国の補助事業である「街なみ環境整備事業」を平成7年度から導入し、「街なみ環境整備事業促進区域（48ha）」を定め事業実施を行った。

この事業の柱は、①小公園や公衆トイレ等の地区施設整備と②住宅等の修景に補助を行う助成事業（須坂地区歴史的景観保存対策事業補助金）の二つからなり、「そこに住む住民の皆さんの創意工夫」を盛り込んだ事業の実施が可能であることから、地区毎に「まちづくり協定」が締結され、併せてそれぞれの地区に「まちづくり推進協議会」も発足し独自のまちづくりの動きも出ている。

4 須坂地区歴史的景観保存対策事業

修理事業と修景事業に分けられ、修理事業は昭和初期までに建てられた建物で「伝統的建造物群保存対策調査」で対象となった建築物等の外観の修理を目的に、歴史的建造物の破壊をくい止め、蔵の原型が保てるように外観の保存修理を図るもので、事業費の3分の2以内の額で500万円を限度としている。

また、修景事業は、歴史的建造物以外の新築物件や増築、改築に際し補助する事業で、須

坂の町並みの景観になじむように和風建築とするもので、屋根をいぶし瓦にしたり、壁を漆喰塗りとするなど、外観を伝統的建造物に模したもので、または、調和した和風建築とするものに対し補助する制度で、事業費の3分の2以内の額で300万円を限度としている。

5 須坂地区歴史的景観保存対策事業の成果

平成5年から平成21年度までに194件の修理・修景事業を行ったが、地区全体ではまだ10数パーセントの修理・修景率である。

街なみ環境整備事業は平成7年度から導入し、平成16年度までに10年間事業を実施した。また、平成17年度には事業の延長申請を行い、平成21年までの事業期間としたが、17年度から21年度までの5年間では、修理・修景の件数が1件しかなく、その後、希望者もいなかったため平成21年度をもって事業を終了とした。

6 蔵の町並みキャンパス事業

歴史と文化の集積、産業遺産でもある蔵造りの建物等を活用し、産・学・官・民の連携により、若者が集い、交流が生まれ、21世紀を担う知の創出と発信の地とすることを目的に、平成18年度から長野市内の信州大学、清泉女学院大学、長野県短期大学、長野工業高等専門学校^の学生による、須坂の町並みや歴史的建築物を題材とした研究や授業を行っている。

年々参加大学、学生数も増え、中心市街地の賑わいの創出の一助となっている。

※平成18年度からの取組み内容については別紙参照

7 平成22年度に現況調査を実施

昭和63年実施の「信州須坂町並み調査」、平成元年実施の「伝統的建造物群保存対策調査」から20年が経過し、また、町なかでは、歴史的建物の取り壊しが目に付くようになってきたことから、平成22年5月から10月にかけて、建物の現況調査及び所有者等にアンケート調査を実施した。

現況調査の結果、町なかの歴史的建物347軒の内、現存する建物は181件と半減していることが分かった。

このままでは、須坂の歴史、文化の集積している歴史的建物を後世に伝えていくことが困難となってしまうため、平成23年7月から歴史的建物を活用した維持保存策を検討する、「須坂市歴史的建物維持・保存・活用検討委員会」を設置し、アンケート調査結果を参考としながら、維持保存策を検討している。

《参考文献》

- ・日本ナショナルトラスト（財団法人 観光資源保護財団）

『須坂の歴史的町並み調査報告書』 1989年

(別紙)

蔵の町並みキャンパス 年度別事業概要

年度	参加大学 学部数	参加者数 (延べ人数)	実施事業内容
18	4校5学部	850人	<p>信州大学工学部 3年「民家の再生」「街区の再生」 2年「住宅の設計」</p> <p>信州大学教育学部・上越教育大学 「アートを通じた街の再発見事業」</p> <p>長野県短期大学 「須坂の生活・文化を学ぶ」2専攻</p> <p>長野工業高等専門学校 「まゆぐら館再修景計画」</p> <p>蔵の町並みキャンパス作品展 蔵の町並みキャンパス成果発表会</p>
19	4校5学部	1,100人	<p>信州大学工学部 3年「民家の再生」「街区の再生」 2年「住宅の設計」</p> <p>研究室「旧上高井郡役所外構設計提案」 研究室「階段歩行時の印象評価研究」</p> <p>信州大学教育学部・上越教育大学 「動物造形作品展示、ワークショップ」</p> <p>長野県短期大学 「須坂の生活・文化を学ぶ」2専攻</p> <p>長野工業高等専門学校 「まゆぐら周辺に住宅の提案」</p> <p>蔵の町並みキャンパス作品展 蔵の町並みキャンパス成果発表会</p>
20	4校7学部	1,300人	<p>信州大学工学部 3年「民家の再生」「街区の再生」 2年「住宅の設計」</p> <p>研究室「水車小屋遺構調査」 研究室「階段歩行時の印象評価研究」</p> <p>信州大学教育学部・上越教育大学 「SUZAKART プロジェクト2008」</p> <p>長野県短期大学 「須坂の生活・文化を学ぶ」3専攻</p> <p>清泉女学院大学 「地域の課題解決策を探るフィールドワーク」</p> <p>蔵の町並みキャンパス作品展 蔵の町並みキャンパス成果発表会・交流会</p>

21	5校9学部	1,400人	<p>信州大学工学部 3年「民家の再生」「街区の再生」 2年「住宅の設計」 研究室「坂田浄水場建造物調査」 研究室「照明器具の与える影響評価研究」 研究室「障子のデザイン評価研究」</p> <p>信州大学教育学部 「SUZAKART プロジェクト 2009」 長野県短期大学 「須坂の生活・文化を学ぶ」4専攻 清泉女学院大学 「地域の課題解決策を探すフィールドワーク」 長野工業高等専門学校 「街並みを活かした住宅設計」 松本大学 「地域の課題調査」 蔵の町並みキャンパス作品展 蔵の町並みキャンパス成果発表会・交流会</p>
22	6校8学部	1,200人	<p>信州大学工学部 3年「民家の再生」「街区の再生」 2年「住宅の設計」</p> <p>信州大学教育学部 「SUZAKART プロジェクト 2010」 長野県短期大学 「須坂の生活・文化を学ぶ」「須坂の製 糸産業についての研修」2専攻 清泉女学院大学 「地域の課題解決策を探すフィールドワーク」 長野工業高等専門学校 「蔵の町並み景観に配慮した二 世帯店舗併用住宅設計」 松本大学 「地域の課題検討等」 蔵の町並みキャンパス作品展 蔵の町並みキャンパス市民講座 蔵の町並みキャンパス成果発表会・交流会</p>

須坂の祇園祭

京都に代表される祇園祭は、ここ須坂の地でも行われています。

祇園祭は、平安時代に京都で始まった、疫病送りの祭です。昔、京都など人口が多く集まる土地では、梅雨の時期に伝染病が流行し、多くの死者がでたそうです。その原因を、「疫神（えきかみ）の蔓延（まんえん）」と考えた当時の民衆が、梅雨の時期に疫神を一箇所に集めて、地域外に送りだす方法を取ったのでした。

その際に疫神を集める方法として、

- ① 神座を美しく飾り目立たせる。
- ② 神座を賑やかに囃したて、生活圏をくまなく廻る。
- ③ 集めた疫神の神座は直ぐに焼く、流す、捨てる。 などを行ったそうです。

綺麗に、賑やかに飾ることで疫神を集め、一気に倒すという方法です。

そして、このような京都の風習が江戸時代に須坂へも伝わり、現在の祇園祭として行われるようになりました。

須坂の祇園祭では、「墨坂神社 芝宮」において、天王さまをお祭した神輿とともに、笠鉾（かさほこ）と屋台（やたい）が繰出します。

華やかに飾られた笠鉾が町中を廻るのは、「疫神」を集めるためとご神体を警護するという二つの意味合いがあるそうです。

古くは、須坂藩主 堀家の御霊祭として行われ、次第に経済力を付けてきた町の衆が「天王おろし」「天王あげ」として、綺麗豪華に飾った笠鉾や屋台を競って造り、今の形となりました。

須坂市では、毎年、7月21日から25日にかけて実施されます。

7月21日は、神殿より天王さまを神輿におろす「天王おろし」（神輿とともに笠鉾行列が行われる）が、7月25日には、神輿より神殿にあげる「天王あげ」（神輿と一緒に灯籠行列が行われる）が行われます。

現在、笠鉾会館ドリームホールでは、笠鉾11基と屋台4台（共に須坂市有形民俗文化財に指定されている）を常設展示しています。

《参考文献》

- ・須坂の祇園祭り笠鉾（笠鉾会館ドリームホール）